

続出する民泊リッチ | 子宮頸がんワクチンに悩む少女

Wedge

Guiding Japan
forward

ウェッジ

APRIL 2016
Vol.28 No.4
FREE
ご自由に
お持ち帰りください

4

Special Report

訪日外国人を囲い込む 中国民泊



Wedge Opinion

圧倒的劣勢の南シナ海
対抗策はまだある
中国が南沙諸島にレーダー設置

Wedge Report

子宮頸がんワクチン
「被害」からの解放
暴走する大人と沈黙する少女たち

Wedge Report

リストラした半導体に
再び挑む企業の狙い
三菱電機、日立、デンソーも

暴走する大人と沈黙する少女たち

子宮頸がんワクチン「被害」からの解放

ワクチンの「被害」とすることで、大人たちは何か大切なことを見失っているのではないだろうか。子宮頸がんワクチンの被害を訴える少女たちと「向き合う」とは――。

文・村中璃子 Riko Muranaka



MASAKI TOYURA / A COLLECTION / GETTY IMAGES

東

京スカイツリー。東京に暮らす他の忙しい大人たちと同様、私はこの街の新しいシンボルに行ってみたと思ったことは無い。「東京だったらスカイツリーに行ってみてください」。少女の言葉で、私の診ている患者さんからのいただき物のことを思い出した。

東京の明る過ぎる夜空を作るスカイツリーの中には、プラネタリウムがある。星空に餓えた都会の人たちのためのこの施設が職人の手作業で作られていることはあまり知られていない。いただき物というのは、「職人」と書いた若い女性の患者さんがくれたプラネタリウムの入場券だ。丹精込めて作った星空が高く評価されればされるほど、仕事はやつてくるが、一人の作業では追いつかない。ある日、彼女の大切な右手は動かなくなってしまった。

緑色のダッフルを着た少女の足と手

「プラネタリウム……素敵ですね、ぜひ行きたいです。先生の患者さんが作ってるんですか」。そう答えた少女は高校3年生の山口彩（仮名）。髪を低

も治療もなかった。

しかし、退院後に過呼吸発作が起きた。通りがかりに、救急車で救急隊員が患者さんの心臓マッサージをしているのを見た時のことだ。意識はあり、目もあいていたが、耳が聞こえなくなり、手が伸びない感じがした。別の救急車が来て搬送された。体調が悪いのに学校に行けという親と喧嘩して学校まで歩いた時も、プリントをもらいに行った職員室で担任の顔を見てほっとしたのか過呼吸になった。翌年1月、また同じように4日間、何もしない入院をした。しかし、それから1カ月後の中3の2月、今度は足がつっぱり、うまく歩けないようになった。体重減少、嘔吐、関節が滑らかじゃない感じなどの症状が現れ、再び2週間入院した。「そういえば、受験直前だったので病院で勉強していました」と、彩は当時を振り返る。

「親も私もその気になってました。綺麗な服を着ていくつも音大を見に行つて、自分でもお嬢様だなんて。小5か小6の時のことです」

と吹奏楽コンクールのための合宿が重なった。昼間はマイクロスコープに乗り込んで野球の応援に、夕方は学校に戻って遅くまで吹奏楽の練習をするハードな生活だった。合宿の最終日、応援と練習を終え、大きな荷物を持って駅のエスカレーターを登りきったところで意識を失った。一緒にいた友達が救急車を呼んでくれた。診断は熱中症。このところ水を飲んでも吐き、食欲の無い状態が続いており、炎天下での野球応援中も水分が取れていなかった。救急搬送された整形外科には1週間入院した。ところが、回復したつもりなのに、母親は「歩き方が変だ」と言う。自分では痛くないし、歩けている。力が入らないわけじゃない。この時、「精神的なものだね」と医者がつぶやくのを聞いた。大学病院の小児科に転院してさらに1週間入院したが、検査もリハビリもなかった。

その後、足の状態はますますおかしくなっていた。近くの整形外科を受診すると腱反射^注が出過ぎだと言われたが、いくつもの病院で調べても原因は分からない。そして高3の5月、現在通っている大学病院の神経内科に

い位置で一本に束ね、淡い緑色のダッフルコートを着た少女は、この春、東京にある医療系の大学へ進学する。緊張していると言いが表情は明るく、どこにでもある普通の女の子だ。ドリンクバーに飲み物を取りに誘うと、少し足を引くように歩いた。子宮頸がんワクチンを接種したのは、中学2年生の9月、11月、3月。中2の終わりまでに3回の接種が終わっている。「ワクチンのせいかもしれない」と考え始めたのは高3の5月頃だが、思い返してみると2回目のワクチン接種後から体調がすぐれない。子宮頸がんワクチンは「すごく痛くてシラキが入ってくる感じ」と聞いていたが、痛みは思ったほどではなかった。けれども、1カ月くらいすると頭痛と頻脈が始まった。大学病院の小児科で検査したが、脳の異常は認められず起立性調節障害との診断を受け、色々と薬をもらった。

大きく体調を崩すきっかけとなったのは、高1の夏のことだ。高校に入れた彩は、中学でも3年間所属した吹奏楽部に入った。野球が強いことで有名な彩の高校は、その夏も甲子園を目指して勝ち進んでいた。野球の地方予選

COLUMN 01

アルミニウムの
アジュバントは危険か

アジュバントとはワクチンの免疫原性（免疫を引き起こす力）を高めるために用いられる添加物のこと。1926年にジフテリアトキソイドを沈降して精製する目的でアルミニウム塩（アラム）が用いられた際、たまたま免疫原性が高まることがわかり、1930年代には実用化されることになった。

子宮頸がんワクチンには2種類があり、GSKのサーバリックスにはAS04と呼ばれる「アラム（500 μ g）+MPL（50 μ g）」の混合アジュバントが、MSDのガーダシルには「アラム（225 μ g）」の単味アジュバントが使われている。ふたつの子宮頸がんワクチンで使われているアジュバントは種類も量も異なり、サーバリックスのAS04アジュバントはB型肝炎ワクチンに使われているものと、ガーダシルのアジュバントは三種混合ワクチンにも使われているものとそれぞれ同じである。

専門家によれば「多くのワクチン製剤で

アラムは使用されているが、水酸化アルミニウムからリン酸アルミニウムまで物質は異なり、使用量や製造方法も違う。ただし、活性や安全性が全く異なるかというところほど大差はない」。

ちなみに2つの子宮頸がんワクチンの本体はいずれもヒトパピロマーウイルス（HPV）のL1抗原であるが、サーバリックスは昆虫細胞で、ガーダシルは酵母菌で発現させており、前者は2種類、後者は4種類のHPV感染を予防する効果がある。2つ

のワクチンは全く別の製剤であると言える。しかし、ワクチンの副反応と言われる症状の発生率はサーバリックスとガーダシルで有意差がない（表参照）。また、同じアジュバントが使われているB型肝炎ワクチンや三種混合ワクチンで、子宮頸がんワクチンと似たような症状が起きているという報告もない。これらのことから、アジュバントが子宮頸がんワクチンの副反応と言われる症状の原因となっていることは考えがたい。

2つの子宮頸がんワクチンは
全く異なるものなのに副反応発生率に差がない

（出所）2014年7月4日に開催された第10回厚生科学審議会予防接種・ワクチン分科会副反応検討部会資料
（注）副反応報告数は販売開始から2014年3月末までの医療機関報告と企業報告の合計

製品名	サーバリックス	ガーダシル
メーカー	GSK	MSD
発現させている細胞	昆虫細胞	酵母菌
アジュバント	AS04（アラム+MPL）	アラム
予防するHPV型	16、18型の2種類	16、18、6、11型の4種類
副反応報告数	10万接種あたり28.9件	10万接種あたり23.9件
医師が重篤と判断した件数	10万接種あたり6.9件	10万接種あたり7.1件
広汎な疼痛または運動障害 （うち、3カ月以上持続）	10万接種あたり1.9件 10万接種あたり1.0件	10万接種あたり2.3件 10万接種あたり1.3件

入れ替えるのだ。『自己抗体（注）は何も見つかりませんでした。他の検査も、脳の血流が少し低下して、腱反射（注）異常が見られるというだけで、大きな問題はなし。脳血流低下も腱反射の異常も理由は説明できないが、ワクチンを打った後に起きているし、別の原因かもしれないけど、症状は自己免疫っぽいからという感じで免疫吸着を勧められました。2回やって良くなったので、もう一度やらないかと勧められています。明細を見ただけ2週間入院して1回が100万円くらいでした」と彩は言う。

免疫吸着は高価な治療法である上、除去できるとされる自己抗体が決まっている。そのため、実施は慎重に検討する必要があるが、自己抗体が見つからなかった彩の場合、何を目的としてこの治療法が選択されたのだろうか。そもそも、ワクチンで自己免疫疾患が起きているというのは仮説であり、子宮頸がんワクチンを打った患者さんたちに特徴的に見られる自己抗体というもの聞かない。

ある小児免疫を専門とする医師によれば「免疫吸着については原理が分からず、理解できません。免疫吸着がも

し自己抗体だけを取り除くことができ、画期的な治療なら、多くの自己免疫疾患で第一選択の治療法になっているでしょう」と言う。

ハンス治療の暴走は、ステロイドパルスや免疫吸着にとどまらない。筆者は子宮頸がんワクチン接種後に痛みを訴える少女たちに「脊髄電気刺激法（SCS）」を行っているという脳神経外科医を訪ねた。SCSとは、手術して患者の脊柱管内（硬膜外）に金属の電極を埋め込み、電流を送ることで痛みを脳に伝える物質を減らし、痛みの軽減を図る治療法だという。保険もきくが、日本では実施してよい年齢や疾患に関する明確なガイドラインがない。「ワクチン脳症ですよ？」かなりの医療被害に思う。痛みや意識消失、学力低下、不随意運動なんかがあつて、全然治らないから途中で見捨てられちゃう。ワクチン脳症に限らず、他の先生がSCSをやらないと判断した患者さんでも、僕のところではやります」と医師は言う。

この医師は15年間で800例のSCS手術実績を持ち、子宮頸がんワクチン後の患者2人にもSCSを実施したという。医師に「ワクチン脳症」によ

のは、音大を目指して挫折した母親が実家から持ってきた古いピアノだ。ヤマハ音楽教室に3歳から通い始め、小1の時には特別コースに入った。中1の時には音大生が受けても合格できないグレード4の試験に合格した。周りには大人ばかりだった。嬉しかった。

「でも私のピアノはダメダメなんです。手がバタバタしてて。コンクールは小1から小6まで全部出たけど一度も入賞したことがありません。きょうだいはピアノが嫌いで小6でやめちゃったけど、私より才能があつて2回入賞しています」

親との関係はこの頃、あまり良くなかった。「ああ、『小5』っていう文字が今でも思い浮かびます。小5の夏休みにお母さんが全教科のドリルを買ってきて、毎日ここからここまでって全部お母さんが決めて、採点もお母さんがやるんです。死ぬほど嫌でした」

高校は偏差値50くらいのところを志望した。狙っていたのは偏差値60以上のところだったが、結局受けなかった。「自分より下のところでトップになって優越感に浸りたいって。大学は推薦で受かったんですが、もったいない高校に行ったら推薦なんて無理だったと

思う」学校はあまり行かれていないが、彩の成績は学年で4位だ。

**身体化する不安、痛み、恐怖
電極を埋め込まれた女の子**

中2のワクチン接種以来体調を崩し、高1の夏に倒れてからさらに体調を悪化させていた彩が、初めて「良くなった」という変化を感じたのは高3の夏休みだ。

「神経内科でステロイドパルス（ステロイド大量点滴静注）をやったのは高3の6月です。痛みは良くなったけど、足がフワフワするっていうか、不快に軽くなったので1回だけでやめました。トイレの水の流れる音が『ラファ』から『ソミ』になっちゃった。免疫吸着は2回やっています。ステロイドパルスの時に1カ月も休んじやったので、1回目は夏休みを待ってから、2回目は冬休みに。ステロイドパルスがダメだったから免疫吸着にも期待していなかったのにびっくりするくらい良くなって、関節のギギギという感じが滑らかになり、1分間に200あった脈も150くらいになって、歩きやすくなりました」

ステロイドパルスは大量のステロイ

ドを点滴する治療法で、効果も強いが副作用も強いことで知られる。病気の原因とその病気の効果が確認されている場合に使うのであればよいが、異常のない人にむやみに用いれば、当然、体調は悪くなるだろう。「子宮頸がんワクチンは危ない」と主張する一部医師たちの間では、ステロイドパルスが標準的治療法となっている。

彼らは、本来なら異物を攻撃するはずの免疫系が、ワクチンのアジュバント（コラム参照）のせいで自分の脳を攻撃するようになり、自己免疫性の脳症である「HANSEN」子宮頸がんワクチン関連神経免疫異常症候群」が起きている。しかし、ワクチン接種後に体調を崩したと訴える少女たちを検査しても、自己抗体など免疫の異常が起きているという証拠は出てこない。ハンスは、あくまでも「仮説」だ。

ハンスを提唱する医師たちが登場したのは、重篤な副作用が生じているという懸念に配慮し、子宮頸がんワクチンの積極的接種推奨が停止されてから半年後の14年初め頃。その中心人物は、霞が関アーバンクリニック院長の西岡久寿樹氏。一般財団法人・難病治療研

究財団の指名を受けて子宮頸がんワクチン副反応の研究を行い、その成果を一般財団法人・線維筋痛症学会で発表しているというが、難病治療研究財団と線維筋痛症学会はいずれも西岡氏が自分で作ったものだ。

都内にある複数の大学病院では、アーバンクリニックでステロイド治療を受けて体調が悪化し、セカンドオピニオンを求めてくるケースが後を絶たない。「怖くなつてうちに来たという患者さん多いです。うちで投薬せずに診ていた患者さんがアーバンクリニックにセカンドオピニオンを求め、かなりの量のステロイドと免疫抑制剤を投与されて体調が悪化し、結局、またうちに戻ってきて薬をやめることから治療し直すケースもあります」（ある都内大学病院の医師）。

彩が良くなったという「免疫吸着」もステロイドパルスと同様、自己免疫疾患などに使うことのある血漿交換療法（一種だ。血漿交換は、血液の液体成分である血漿から、特殊なフィルターを用いて、自己抗体など病気の原因物質だけを除去し、きれいになった血漿を再び体内に戻す治療法である。つまり、全身の血を濾しながら抜いて、

JACK WILLO / GETTY IMAGES



“それぞれの先生がバラバラに診ている ちゃんと対応してほしかっただけ”

る痛みと、思春期にありがちな心的背景のある痛みとの違いを問うと、「精神科で診ていないんだから精神の病気じゃないですよ」と答える。また、「ワクチンを打った患者さんでも打っていない患者さんでもよく似た症状がありますよね」と訊くと、「そうか……そうだね、じゃあワクチンは関係ないかもしれないね」と言った。

一方、疼痛治療の基本は運動療法と心理療法にあると考える大学の准教授はこう言う。

「SCSに限らず、点滴や手術など侵襲性^{〔注3〕}の高い治療ほど患者は満足し、一時的にはすごく良くなります。

でも、また痛くなってくるので、患者さんはもともと、より侵襲性の高い治療を求めるようになる。もちろん、手を尽くしても治りづらい疼痛はありますが、検査で異常がないのに、子宮頸がんワクチンを打ってから全身が痛いとか歩けないとか言っている女の子の場合、けいれん症状を伴うような重症でも、運動療法と心理療法を続け

ば大抵は半年ぐらいで良くなったと感じ始めます」

「ちなみに僕が留学していたのは、世界で初めてSCSを開発したワシントン大学の学際疼痛センターですが、担当の脳神経外科医は『私は最初の10年は狂ったようにSCSを入れ、次の10年は狂ったようにSCSを抜いた』と自嘲していました」

子宮頸がんワクチン接種後に起きた激しい痛みの原因が特定できず、病院を転々とした後にこの医師を訪れ、SCS手術を受けた少女がいた。痛みは10から7くらいになったというが、その後、メーカーからもっと深く広く刺さる新しい電極を紹介されると、もう一度電極を埋める手術をしたという。

小児科や精神科領域では馴染みのある病態に「身体化」という考え方があ。身体化は心が原因の病気という誤解があるが、心がきっかけとなった身体

の病気である。

例えば、両親が離婚の話し合いを始めたときに突然、左足が動かなくなった小6の女の子。リハビリとカウンセリングを続けてもあまり効果がな

ったが、両親の離婚解消が決まると急に動きが良くなった。これには親も驚いた。しかし、いったん動かなくなっただけは簡単には元に戻らない。「動かさない」という指令を出す脳の誤作動は原因が取り除かれても続き、動かさなかった筋肉は衰えているからだ。離婚解消から半年以上たった今も、少女はまだリハビリを続けている。

身体化はストレスだけでなく、恐怖、不安、痛み、怒りなど様々な情動がきっかけとなって起こる。大きな交通事故を起こして無傷でも、棘が刺さっただけでも、転んだだけでも、全身疼痛や歩行困難のきっかけとなる。自覚的なきっかけがない例も少なくない。テレビでよく見る、子宮頸がんワクチン接種後に起きているというあの激しいけいれんも、多くが脳波異常を伴わない「偽発作」で、身体化の代表例だ(2015年11月号の前回記事参照)。

身体化を理解しないのは 患者か医師か

両親の離婚で足が動かなくなった子の話を聞いた彩は、しばらく沈黙してからこう言った。

「きっと大体の子はわかってい

います。でも、なんだかもやっとした気持ちが残りますね。具合が悪かった時、本当はもうちょっと優しくしてほしかったのかも。実は、後輩で同じじ症状で同じ病院に通っている子がいるんですが、救急で点滴してもらえたのが分かったんです。他の子も同じ対応だったら諦めがつくけど、なんで？って思いがずっとあります。ちゃんとしてもらえる例もあるんだって。

中3の時から、このことを思い出しては3カ月に一度くらい腹を立てるっていうことを繰り返しています。いや、毎日考えているかな……」

彩は続けた。

「大学病院の小児科の主治医は最悪だった。具合悪くて行ったのに、『何でもないので来たの？ 点滴してほしいうって思っでしょ。本当に痛いのか？』って言われて、どこからそういう思考ができるんだろう！って思った。あの人は体の病気にしか興味がない。点滴してほしんじゃない。カウンスリングでもなんでもいいから、ちゃんと対応してほしかっただけ」

皮肉なことに、心の問題をあまり重要視しない神経を専門とする医師たちが、心の病気をきちんと診てもらえな

かった患者や心の病気を否定したい患者が行き着く場所となっている。そのため、背景に心の問題が隠れている場合でも、原因不明の神経の病気として、ステロイドパルスや免疫吸着などの治療が積極的に行われてしまう。

「どうしたらいいかわかんないです。小児科は強迫性障害の面接、神経内科は足や痛みの治療、精神科は過呼吸の薬っていうふうな、それぞれの先生はそれぞれの症状をバラバラに診ているだけに思えて……。私は本当に適切な治療を受けられているのでしょうか」

原因が特定できない歩行困難、けいれん、疼痛などの神経症状はすべて精神科領域の問題なのか——この神学論争は、決して子宮頸がんワクチンを機に始まったことではない。神経内科は精神科領域から神経で説明できそうなことを探す学問でもあり、日本の薬害訴訟の歴史は神経内科学と共にある。

このことは、日本のワクチン訴訟の基礎である「白木4原則」を作った神経病理医で元東京大学医学部長の白木博次氏が、元々は精神科医だったことにも象徴されている。

白木博次の恩師は、ハンスを唱える自律神経学会理事長、黒岩義之氏らが

「尊敬する」と言う豊倉康夫氏だ。豊倉氏は東京大学医学部神経内科学講座初代教授で、薬害「スモン」(Subacute Myelo-Optico Neuropathy: 亜急性脊髄視神経症)の名付け親。白木氏は神経病理の講師として豊倉氏と共に薬害スモンを立証した。スモンを意識して「ハンス(HPV Vaccine Associated Neuropathy)」という病名が作られたことは、英語を見れば明らかだろう。

ハンス派の論調はこうだ。「私の尊敬する豊倉先生も言っています。『2度見たら何かあると思え。3度見たら只事ではない』。僕はまさに慈恵医大の入院患者さんで3人続けて見たからハンスなんです」(黒岩氏)。

「3度見たら」の構えは同じでも、残念なことにスモンとハンスは同じではない。白木4原則とは、ワクチンと疾患との因果関係は、①ワクチン接種と接種後の事故(疾病)が時間的・空間的に密接していること、②疾病について、ワクチン接種以外の原因が考えられないこと、③接種後の事故と後遺症(折れ曲がり)が原則として質的に強烈であること、④事故発生のメカニズムが、実験、病理、臨床などの観点からみて、科学的、学問的に実証性や

妥当性があること、の4条件が満たされることで初めて立証されるとするもので、「医学と立法の谷間を架けるものさし」と呼ばれた。豊倉氏は、白木氏と共に薬害を立証するための科学的エビデンスを真摯に求め、提示した。国内外の疫学・臨床・動物実験データが集まる中、少なくとも現時点のハンスは4原則を満たしていない。「脳に異常あり」とするハンス派とは一線を画する立場からハンス派に振れ、動向が注目される信州大学医学部神経内科の池田修一教授も、最近では「ワクチンが関連していそうだというのは仮説。客観的な所見が何も示せないならワクチンと関係があると説明すべきではない」としている。

しかし、15年10月の線維筋痛症学会では池田氏も「血漿交換などの治療はやっている」と語っていた。ハンス脳症の存在を強く信じ、積極的に血漿交換やステロイドパルスを用いることで有名な鹿児島大学医学部の高嶋博教授も、池田氏が班長を務める子宮頸がんワクチン副反応研究班に属する。神経を専門とする医師たちは、エビデンスとなる実験データも臨床データも示されていないのに、侵襲性^{〔注3〕}の高い

治療を選択する傾向にある。もちろん、ワクチン接種との因果関係にかかわらず、自己免疫性の病気である可能性が否定できないケースもあるだろう。しかし、症状や訴えと、ワクチンを打っている事実だけから判断して、侵襲性の高い治療を用いることに關しては、疑問を持つ医師たちも少なくない。

「ハンス」の呪文で作られる患者 「治る」の一言で良くなる患者

「お互いに依存しているということですね。医者も楽だし、親も子もワクチンのせいにしたほうが楽なこと。つきつけられなくてすむから」

彩は小さく言った。

13年6月に政府が「積極的接種勧奨の停止」という不思議な行政決定をしてからというもの、子宮頸がんワクチンの接種は事実上停止している。自治体の補助のおかげで7割近くあった接種率が、今は1%を下回っている。

「それでもまだ新たな患者さんが来ます。ワクチンを打ったのはもう何年も前なのに、最近、頭痛が続くからワクチンかも、生理がひどいからワクチンかもと不安になるわけです」(子宮頸がんワクチン副反応外来担当医)

この少女が通っているのは、偏差値70を超える進学校だ。2年生から朝夕にテストがあり、毎日結果が貼りだされる。「本人も京大に行きたいと言っていて、母親としても何が何でも行っしてほしいんです」と母親は言う。ひどい頭痛に加えて、吐き気が始まった。学校に迎えに行くこともしよっちゅうで、そんな時はいつも左手に「不随意運動」が出ていたが、母親はまた「テストや受験のプレッシャーかな」と受け流していた。

しかし、子宮頸がんワクチンで光過敏になったという子の話をテレビで見ると「自分の症状とそっくりだ」と思った少女は母親に相談。親子でこの大病院を訪ねることにした。

幸いなことに主治医には「ワクチンは関係ないかなあ」と言われた。親子共に胸をなでおろすと、不随意運動は驚くほど治まったという。

少女の主治医はこう言う。「新しい接種者もほとんどいない今、症状もないのに不安だけで受診する子たちがほとんどです。症状があっても『ワクチンに関係ないよ』という安心し、もう来ません。昨日も1人来て帰りました」。一方、母親は「高3になるんだ

ハンスを唱える医師たちに、ハンスによれば、ハンスには遅延性のアレルギー反応もあり、「何年経つてもなり、何度でもなる」と言う。

「テレビで見たけどどうしよう」と、相談だけできる患者さんもなくさんいます。ハンス」とある。という考えが患者を作り、それがメディアを通じて拡散し、ハンスの女の子を増やしているのかもしれない」(前出の副反応外来担当医)

「ハンスは治らないし、再発する」といった報道が、患者さん

の治療の大きなハードルになっています。うちではワクチンのせいかどうかはあまり問わないようにして治療しますが、患者さんの多くは口に出さなくても『やっぱりワクチンのせいだろう』と心のどこかで思っているのです。本当に治るのだろうか、いつかまた悪くなるかもしれないといった不安が治療を長引かせています」(ある大学教授)

手の震えと光過敏、片頭痛を主訴に

からもっと頑張りなさいって、昨日また言っちゃったんです、そうしたら手の震えがまた出ちゃって。ほんと、私のせいかも」と悲しむ。

「親御さんがどっしりと構えているとほとんどの子供は良くなります。本来であれば、検査に異常がない時点で医者の方も、安心しろ、治る、とはつきり言うことが大切なんです。残念ながらこういう施設が少ない。必要な子には心理療法や運動療法をやりますが、薬や点滴とは違って、時間はかかるけどお金は取れない。一般病院ではそんなキャパがありません」(大病院勤務の少女の主治医)

かかってきた突然の電話 「もう会はやらないわよね？」

「治るって言ったらいけないんです。患者会だからどうやったら治るのかという情報を共有するのが目的なのに、変ですよ」こう語るのは子供が回復して、被害者の会をやめたある母親だ。「食事療法などで治ったと言ったら、今まで毎日のようにチャットで親しくしていたのに電話がかかってきて『あら、じゃあもう会はやらないわよね?』と言われました。別に要らないなんて



関西の大病院を受診した高校2年生の少女がいる。小6から中1までの間に子宮頸がんワクチンを3回接種している。「小さい頃から、ピアノ、バレエ、サッカー、空手と、とにかく毎日習い事をやらせていました!」と快活に答えるのは少女の母親だ。中2の夏から眩しさが出現した。テニス部なので目が日焼けしたのかなと思っていたが、夜のドライブで街灯を見ても眩しくサングラスが必要なものになった。副生徒会長になる直前だったので、「そのプレッシャーじゃない

言っていないのに、何の断りもなく掲示板からも追い出され、SNSもブロックされました」。似た訴えを複数の元被害者の会の大人たちから聞いた。

子宮頸がんワクチン被害者連絡会通称、被害者の会。子宮頸がんワクチン関連の患者や家族の間では「会」と短く呼ばれている。被害者の会という名称だが患者である少女たちの会ではなく、実際には被害者の親たちの、特に母親たちの会である。

彩は言う。「大人に子供はみんなひいてます。特に食事療法の人たちと会の人たちがいがみ合って、子供たちはやめてよって思ってる。食事療法の人たちも大人ばかりで、知っている子供は1人だけです」

彩は「知っている」という言葉を使ったが、子供同士もツイッターでつながっているだけで互いに顔は知らない。ツイッターでつながる少女の数は50人程度だが、互いにフォローしあっているだけで、大人のように頻繁にはつぶやかない。子供のLINEグループもあるが、全く盛り上がりがないという。

「会は、ワクチンのせいって言ってく

れないと納得しない親たちの集まり。子供はみんなそう思ってる。子供たちは、親がワクチンのせいだと言ってるし、他に言いようがない感じだと思ってる。自分の親を否定できないです……しかも自分のためにやってくれているんだって思ったら余計に。実際には、どの子供もそっとしておいてほしいんだと思う。どんな子も『辛いから現状知ってほしい』なんて考えてる感じはあります。みんな具合悪いし、困ってるし。嫌だけど、親みたいになんていみません」

筆者の書いた前回の記事にネット上で大騒ぎしていたのも、確かに大人ばかりだった。「私も半分、うんうんと思いつつ読みました。免疫吸着が効いたから違う!って、反発もしましたけど(笑)。子供たちが静かだったのは、何にも言えなかったからじゃないかな」と、彩は言う。

子宮頸がんワクチンのせいで娘が体調を崩したという母親たちはSNSを通じて知り合い、「会」を組織した。SNSを使って娘の症状を詳細に発信し、仲間内でフォローを増やした。国会や製薬会社へ乗り込む母親たちにはカメラや取材のマイクが向けられ、

普通の母親たちは特別な母親たちになつた。会やSNS上のネットワークは一見、救済や補償を目的とした強力な運動体のように見えるが、会は母親たちの自己実現の場であり、SNSは学校に行かなくなった孤独な少女たちの大切な居場所でもある。

「うちの親は会の人たちみたいじゃなくて本当によかったって思います。母はワクチンはどっちでもいい人。父はワクチンじゃないかというと突然張り切りだす人です。笑。精神的なものも大きいけれどワクチンもちよつとはあるだろうと思ってる。私もまだ、完全にワクチンのせいじゃないとは思っていませんが、絶対にワクチンじゃなきゃダメだっていう気はしません」

「電極の話聞いてぞっとしました。ツイッター上には『うちの子が私を切り刻んで原因と治療法を探してと言っている』なんて書く親もいますが、あれも会の人。子どもが本当にそう言っているのかは分からないけど、とにかく会では重い方が偉いみたいな感じになつちゃって、意味が分かりません」

「前は親と仲が悪いというか、喧嘩が

できなくて辛かった。自分の不満を言えるようになって、体調のことを分かってもらえて今はだいぶ楽になったけど。特に中3の頃、体調が良くないのに親に学校行けって言われて本当に辛かった。苦しくて、頭痛くて、だるい。食欲もなくて体重が6^キ減りました。起きてはいるけれど布団から出られない。母親にはウソとか仮病とか言われるし、父親には『世の中もつと辛い人がいるのに自分だけ辛いと思うな』ってよく怒鳴られました。でも、今は分かってくれてる、本当に私のこと考えてくれる、いい親だなんて思います」

あれほどまでに反発していた親に彩は今、とても感謝している。筆者が、「中2からだから、もう4年だもんね。でも、良くなってきたし、このまま良くなつちやえばいいね」と言うと、彩はこう答えた。

「4年なんです……しみじみ(笑)。今は特に不自由もないし、免疫吸着も必要と感じていません。大学行ったら治つちやうんじやないかって感じもします。侵襲性^{〔注3〕}の低い治療で良くなつちやえばいい。何もしないで治つたらほんといい、子供たちはその考えにとっても共感すると思います」

体の問題と同じくらい真剣に心の方にも向き合ってほしい

「私は小児心理面接を2年半、精神科に行つて抗うつ薬も飲んで、過呼吸には安定剤も飲みました。一応、ひととおりやった気でいて、それでも良くならないから最終的にステロイドパルスとか免疫吸着を試してもいいのかわかって思つたんです。しかも、免疫吸着やったらよくなった! でも、『治療した気分になつたから良くなったのか』な」というのもありました。医療者は患者さんの心の問題というのを軽んじていると思う。けれども、身体の問題と同じくらい真剣に、心の方にも向き合つてほしいです。そもそも、私、こんなに長い時間をかけて自分のことを全部、一人の先生にしゃべったことがあります」

この日の取材は7時間に及んでいた。受験が終わつて、卒業が決まったのも大きいだろう。

しかし、彩を治したのは、時の流れだけではない。いくつもの診療科からのいくつもの薬や心理面接、免疫吸着も効果があつたのかもしれないが、少女を治したのは、免疫吸着のために1

回100万円の費用を2度も工面し、少女の体調不良に辛抱強く付き合ひながらもどつしりと構えていた親、そして、その親に感謝した少女の心ではないのだろうか。

世界一の高さを誇る電波塔スカイツリーと、プラネタリウムに広がるダイヤモンドを砕いたような夜空。彩はスカイツリーの立つこの都会で、新たな生活を始める。辛く苦しい少女時代だつた。しかし、この経験は彩を、患者を思いやることのできる医療者へと成長させるに違いない。

卒業式が終わつたらほつとしたのかまた寝込んでるという彩と、プラネタリウムに行く約束はまだ果たせていない。そして、プラネタリウムの作者である私の患者さんは、現在また元気になり、日々、新しい夜空を作っている。

〔注1〕 腱反射……膝の下を叩くと足がぼんと上がるなど、筋肉に刺激を与えることで見られる正常な神経の働きによる反射のこと。

〔注2〕 自己抗体……自分の細胞を異物と誤認して攻撃してしまう免疫のこと。

〔注3〕 侵襲性……手術や切開のように、生体を傷つけることを侵襲といい、傷つける度合いが高いことを「侵襲性が高い」と表現する。

むらなか・りこ 医師・ジャーナリスト。一橋大学社会学部・大学院卒、社会学修士。その後、北海道大学医学部卒。WHOの新興・再興感染症対策チームを経て、現在、医療問題を中心に幅広く執筆中。